

女子大学生の日常における制御適合と感情に関する 尺度構成概念の予備的検討

松永, 郁香
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/4777947>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 13, pp.47-51, 2022-03-22. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

女子大学生の日常における制御適合と感情に関する尺度構成概念の予備的検討

松永郁香 九州大学大学院人間環境学府

要約

本研究では、目標志向性と方略が一致すると制御適合が生じ、「自分が正しい方法を用いて目標を追及している」という主観的感覚 (Ozaki, 2011) である適切感が得られるという制御適合理論 (Higgins, 2007) に基づき、日常生活において適切感が生じる場面とその際に用いる方略および、生じている感情について分類することを目的とした。具体的には、女子大学生78名を対象に、分類した文章をもとに尺度の構成概念と各項目の検討を行い、適切感を感じる場面と方略、その時に生じた気持ちについて自由記述による調査を行った。その結果、3つの場面とそれぞれで使用する方略の質問項目が作成され、感情については9つに分類された。しかし、項目を熱望方略、警戒方略に分類することは難しく、制御適合理論における方略を日常場面で適用するためには方略を構成する要素をさらに検討する必要があることが推察された。また感情に関しても、時系列の観点を取り入れることで、適切感とその他の感情の影響を検討することが可能になることが考えられ、そのため日常場面に即した焦点と合致する方略の検討が必要である。

キーワード：制御焦点理論、制御適合理論、適切感

問題

大学生の関わる生活上の問題には、学校生活やその他の活動における対人関係の困難さや、修学上の問題など、様々なものがある。そうした問題には、それに取り組む個人の価値観、対処方略、感情、動機付けが様々な要因とともに絡み合っている。

動機付けに関する研究において、Higgins (1997) は制御焦点理論を提唱し個人の目標志向性を促進焦点 (Promotion Focus) と防止焦点 (Prevention Focus) の2つに区別している。促進焦点は、希望や進歩の欲求を重視し、獲得の在と不在に関心があり、理想や望みを実現することを目標とする。防止焦点は、安全や責任を果たすことを重視し、損失の在と不在に関心があり、義務や責任を果たすことを目標とする。この制御焦点理論では従来の快樂原則を基本原理とし、その中で質的に異なる快/不快の状態に対する接近と回避は独立した自己制御システムに従うと考えられており、両方の焦点を人間は合わせ持っているが、状況に応じてどちらの焦点を活性化させるかは異なるとされている (Molden, Lee, & Higgins, 2007)。したがって、制御焦点を活性化させる場面は個人の特性によって異なる。

さらに Higgins (2007) は、この制御焦点理論を発展させた制御適合理論を提唱した。この理論は、目標に従事する際の方略と合致すると制御適合 (Regulatory Fit) を経験されるとし、加えてそれぞれの志向性には適した方略として、促進焦点には熱望方略 (Eager Strategy) が、防止焦点には警戒方略 (Vigilant Strategy) が適しているとされる (Crowe & Higgins, 1997; Molden, Lee, & Higgins, 2007)。この方略のうち、熱望方略とは大局的で速く、獲得を最大化するような達成手段であり、警戒方略とは局所的で正確かつ損失を最小化するような達成手段である (Crowe & Higgins, 1997)。この制御適合の研究に関して外山ら (2017) が、パフォーマンスのタイプを考慮した上で、制御適合がパフォーマンスに及ぼす影響をその種類別に検討した。その結果、促進焦点では熱望方略を使用することでそれに合致したパフォーマンスが高くなることが示され、同様に防止焦点では警戒方略を使用することでパフォーマンスが高くなることが示された。このことから、パフォーマンス

を向上させるためにはそれぞれの目標志向性に対して適切な方略を適合させることが必要である。

この制御適合理論では、目標達成過程において個人の志向性や方略の使用、また情報の処理によって適切感 (Feeling Right) が生じて価値が付与されることが説明されている (Higgins, Idson, Freitas, Spiegel, & Molgen, 2003)。ここにおける価値とは物事に対する評価や意思決定の基になるものであり、ある対象に価値が帰属されることにより、その対象に対する動機づけや行動が生起するとされている (Higgins, 2005)。尾崎 (2011) によると適切感とは、「自分が正しい手段を用いて目標を追及している主観的感覚」である。したがって、適切感が目標追及の過程において経験されるため目標達成したか否かという結果には関係がない。また、適切感の感情次元は単純な快-不快次元に還元されないことが示唆されている (Camacho, Higgins, & Luger, 2003)。制御適合によって生じる適切感が物事に対して動機づけのもとになる価値に影響を与える要因となっていることが言える。

無論、適切感以外の観点から制御適合による価値の付与を説明する立場も存在する。Florack et al. (2009) は、対象がどの程度好ましいかという感情的評価を指標として研究を行い、促進焦点は二面的情報提示に、防止焦点は一面的情報提示に適合するという仮説を支持し、制御適合の価値の付与が情報の感情価という別の観点からも説明できることを示した。また外山ら (2017) の研究では、制御適合が価値付与に及ぼす影響における適切感と対象の感情価の両プロセスの関係について検討し、適切感よりも対象の感情価による制御適合の効果が強いことが示されたが、同研究では適切感を直接的に測定していないため示唆に留まっている。

日常生活における方略に関して、中学生の友人関係スタイルと怒りの表出の関係性を調査した杳名ら (2011) の研究では、怒りの表出に関しての性差を検討している。その結果、男子より女子の方が言語的な方法で怒りの表出を行いたいと思っていることが明らかになった。これにより、制御適合理論における方略には性差があることが見込まれ、性別ごとに分析または比較

を行い、性差における方略の特徴について理解を深めていく必要がある。

上記の先行研究をまとめると、Higgins (2007) の制御適合理論では、制御適合によって生じる適切感によって対象に価値が付与されているが、Florack (2009) や外山ら (2017) は対象の感情値の方が価値の付与に寄与することを示唆している。このように、適切感だけではなく感情価の側面から価値に与える影響を検討している。しかし、価値に与える影響を検討するうえで、制御適合が生じる日常の場面、適切感と感情についての尺度がなく、適切感と感情価が与える影響について検討が十分にされていない。熱望方略や警戒方略は概念的に促進焦点と防止焦点と重なっており、対処方略の全般的な方針に過ぎない。実験場面における方略使用の統制は可能だが、日常生活において使用される方略の分類を行う際には具体的な基準がないため制御適合が実際に生じているのかを日常において確認することが困難である。そのため、方略を質問項目として具体化する際には、それぞれの方略が求められる個別の問題場面を提示した質問にしていかなければならない。したがって本研究では、日常生活場面での様々な制御適合における適切感と感情を測定する尺度の構成概念を検討することを目的とする。

方法

調査対象者 近畿圏に通う女子大学生1年生から4年生、計78名から回答が得られた。回答に不備は見られなかったため、78名すべて分析対象とした。理由として、杳名ら (2011) のより場面によって女性特有の感情が生じ、また方略が得られる可能性があるためである。

調査期間 2020年7月30日～2020年9月15日まで

調査準備 制御適合が生じている場面と方略をより多く収集、汎用性の高い項目の検討の二点を踏まえ、自由記述による調査を行った。また質問項目の作成においても、方略使用中に生じた感情を回答者自身の言葉で表現するために、自由記述での作成を行った。場面提示に関しては、適切感が生じている状況に近い場面を想起してもらうため、「得意」の言葉が持つ「志をえて満足していること、望みどおりになって満足すること」という意味 (広辞苑新村編, 2018, p14058) を参考に、〈得意な方略を使用する場面〉を質問することにより提示を試みた。

調査内容 以下の3つの質問に対して、自由記述でできるだけ具体的に回答するように求めた。また、複数回答も可能とした。以下が教示文である。(1) 勉強や仕事 (アルバイト)、対人関係などにおいて、あなたの得意なやり方を活かせる場面はどのような場面ですか。(具体例：授業で毎回の単語テストを行う場面) (2) (1) で回答した場面においてあなたはどのような方法を使用しますか。(具体例：ひたすらその単語を繰り返して音読した)。(3) (1) や (2) において、あなたはそのときどのような気持ち (もしくは感覚) になりましたか。(具体例：英単語テストで100点を取るため1週間音読した。その時、安心感を感じたなど)。

調査手続き Google フォームにてアンケートを作成し、そのアンケートのリンクを大学の授業にてメールで依頼した。更に、LINEにて近畿圏の大学に通う学生に対してアンケートの依頼を行った。なお、調査は対象者が好きな時間に回答できるようにし、いつでも中断することが可能であることを事前に文面で

伝えた。また、個人が特定されないように回答の扱いには配慮した。

分析方法 分析方法はKJ法 (川喜田, 1967) に基づいて行った。はじめに自由記述の回答をカード化し、小項目群を作成した。この場面の分類では、場面の類似性によって行った。次にその小項目を中項目としてさらにまとめ、最後にそれぞれの項目でまとめられるものを大項目として設定し、グループ名として分類を行った。なお、まとめるものが困難と判断されたもの、回答が抽象的なものについては「その他」として分析から省いた。

結果

1. 適切感を感じる場面について

場面は81件の回答が得られた。その中で、分類が不可能だった4項目を除外した77件で分類を行った。大項目として、【対人関係】、【学習】、【アルバイト】の3つが挙げられた。分類と回答例を以下の表1に示した。

【対人関係】の小項目として、初対面 (12件)、初対面ではない人 (6件)、グループワーク (6件)、プレゼンテーション (3件) の4つのカテゴリに分類された。【学習】の小項目として、勉強 (12件)、課題 (4件) の2つのカテゴリに分類された。【アルバイト】の小項目として、接客 (17件)、作業 (14件)、職場環境 (3件) の3つのカテゴリに分類された。

2. 場面に応じて使用する適切感を感じる方略について

1で抽出された場面で使用された方略を、それぞれの場面において分類を行った。例えば、初対面の人に対して「笑顔」というカテゴリと、接客における「笑顔」は用いる場面が異なるため、それぞれ独立した方略とした。

適切感を感じる方略について、70件の回答が得られた。まず、【対人関係】の場面のカテゴリごとの方略の分類を行った (表2)。

【対人関係】のなかでも「初対面の人」に対して行う方略については、「笑顔」が5件、「受動的に会話」が3件、「主体的に会話」が3件、「話題を引き出す」が3件、「整理する」が2件であった。「初対面ではない人」では、「整理する」が1件、「尊重する」が2件であった。「グループワーク」では、「説明する」が1件、「同意を求める」が1件、「会話を広げる」が1件であった。「プレゼンテーション」では、「シミュレーション」が1件、「丁寧に整理する」が1件であった。

次に【学習】の場面のカテゴリごとの方略の分類を行った (表3)。

表1 適切感を感じる場面の記述

カテゴリ名	自由記述例	件数
A. 対人関係		
初対面	初対面の人と会話する場面	12
初対面ではない人	友人や先輩などの相談を聞く場面	6
グループワーク	グループワーク	6
プレゼンテーション	人前でプレゼンテーションをするとき	3
B. 学習		
勉強	テストの暗記問題	12
課題	レポート課題をする場面	4
C. アルバイト		
接客	お客様に商品をお勧めする場面	17
作業	決められた作業をきっちり終わらせるとき	14
職場環境	アルバイトで人間関係を構築すること	3
合計		81

「勉強」の場面で行う方略については、“反復する”が7件、“関連させる”が2件、“練習する”が3件であった。「課題」の場面については、“計画する”が3件、“環境調整”が2件であった。

【アルバイト】の場面のカテゴリごとの方略の分類を行った(表4)。

「接客」の場面对して行う方略については、“笑顔”が7件、“主体的に働く”が3件、“工夫する”が3件、“相手を尊重する”が3件であった。「作業」の場面については、“集中する”が4件、“周りを見て行動”が5件、“効率よく行動する”が3件、“主体的に行動する”1件であった。「職場環境」の場面については、“業務を効率化する”が1件、“主体的に動く”が2件であった。

3. 適切感を感じる場面と方略を用いた際の感情について

それぞれの場面で適切感を感じる方略を用いた際に、経験された感情について、90件の回答が得られた。その中で、分類が不可能だった項目3件を省いた87件で分類を行った。その結果を以下の表5に示した。

“幸福感”が21件と最も多く、“優越感”、“達成感”、“安心感”、“満足感”、“効力感”が10件ほどあり、“緊張感”、“不安”、“無心”は最も少なかった。

4. 質問項目の作成

これらの結果をもとに質問項目を作成した。場面は、大項目ごとにそれぞれ方略を用いる小項目の場면을教示文に含めた形とした。以下、場面と方略の質問項目である(表6)。

表2 対人関係における方略の分類

分類名	自由記述例	件数
①初対面		
笑顔	笑顔で接する	5
受動的に会話	相手のパーソナルスペースには入らずに一定の距離を保ちながら笑顔で話しかける	3
主体的に会話	人見知りをしないうでとにかく積極的に相手の話を引き出す	3
話題を引き出す	共通の話題を見つける	3
整理する	名前と顔を頭で整理してすぐ覚える	2
②初対面ではない人		
整理する	頭の中で、話の内容をまとめる	1
尊重する	相手に気を遣ったり、傷つかないような発言を意識したり、面白いことを言ったりする。	2
③グループワーク		
説明する	自分の考えを相手に丁寧に出来るだけ分かりやすく説明する	1
同意を求める	積極的に発言をして、メンバーの意見を求める	1
会話を広げる	全員の意見を尊重し会話を広げた	1
④プレゼンテーション		
シミュレーション	頭の中でイメージトレーニングした	1
丁寧に整理する	たくさんの情報を徹底的に時間をかけて調べあげて、最後にまとめて仕上げにかかる	1
合計		24

表3 学習する場面において用いる方略の分類

分類名	自由記述例	件数
⑤勉強		
反復する	ひたすら単語を音読して、書いた	7
関連させる	その言葉の関連したことを思い浮かべて覚えた	2
練習する	ひたすら問題集をする	3
⑥課題		
計画する	計画的に課題に取り掛かる、集中する	3
環境調整	図書館や学校の自習室など静かに作業を行える環境を整える	2
合計		17

考察

本研究は、日常生活における様々な制御適合における適切感と感情を測定する尺度の構成概念を検討することを目的とした。

その結果、日常生活における制御適合の場面と方略、その際に感じられる感情について分類することができた。しかし、Higgins (2007) の制御適合理論における方略の分類は、今回の検討で明確に分類することは困難であった。その理由として、先に指摘したように Higgins (2007) の制御適合理論における方略は概念的な方略のため、実際に日常生活において使用される方略との間に差異があった可能性が示唆された。このことを踏まえると、熱望方略と警戒方略の概念をより整理することで、具体的にどのような概念を用いればこの2つの方略を捉えられるのかを検討していく必要があると言える。

また、価値の指標に関しても、従来より実用的指標や金銭的指標など様々な指標で研究が行われている。先出の外山ら(2017)の研究も、価値の指標を対象の好ましさとして実験が行われており、適切感が常には価値の付与に強い影響を与えているわけではないことが示唆されている。そのため価値の観点から、適切感と感情ではそれぞれ価値に対してどのような影響を与えるのかを検討を行う必要がある。また異なるのは影響だけではなく、場面と方略のそれぞれで生じる価値の指標も異なる。したがって、価値の指標を含めた制御適合の場面と方略の

表4 アルバイトの場面において用いる方略の分類

分類名	自由記述例	件数
⑦接客		
笑顔	笑顔を欠かさず、常に思いやりをもって接している。	7
主体的に動く	積極的に会話を進めて買い物を楽しんでもらう	3
工夫する	笑顔で目を見て聞かれたことに的確に答えるようにした	3
相手を尊重する	できるだけ相手に共感する	3
⑧作業		
集中する	1つのことに集中して行う。	4
周りを見て行動	一つのことを集中せず、周りを見ながら行動をしている	5
効率よく行動する	また、プライスカードのない商品はその場でまとめて書くといったように効率良く作業できるように準備する。	3
主体的に行動する	自分でも何度か勤務時間外に作る練習をした	1
⑨職場環境		
業務を効率化する	その場で復唱し、すぐに行動して体で覚える	1
主体的に動く	自ら積極的に声をかけるなど働きかけた	2
合計		32

表5 適切感を感じる場面と方略を用いた際に感じる感情

カテゴリ名	自由記述回答例	件数
A. 幸福感	仲良くなれると嬉しいと感じた。	21
B. 優越感	周りの人のために動けていると思うと優越感がある	9
C. 達成感	お客様の望みにあったことができた時、すごく達成感を感じて嬉しかった。	11
D. 安心感	テストはどうにかあったため安堵感があった。	14
E. 満足感	やりがいをを感じる	12
F. 効力感	単純だから覚えやすいと感じた	12
G. 緊張感	やらないとやばい! まだ足りない! って思いました。	2
H. 不安	それを繰り返すうちに失敗するのではないかとという不安な気持ちになることが多いです。	5
I. 無心	無心でいられる	1
合計		87

表6 質問項目

A. 対人関係の場面	
1. 初対面の時に笑顔で話す	
2. プレゼンの時、自ら原稿やスライドを作り、何度も練習する	
3. グループワークの時に、グループ内の会話を広げる	
4. 友人と話す時、面白いことを言う	
5. 初対面の人と話す時、名前と顔を頭の中で整理する	
6. 友人と話す時、話の内容をまとめる	
7. 友人と話す時、相手に気を遣う	
8. グループワークの時、自分の考えを相手に丁寧に説明する。	
9. 初対面で話す時、初めに自分から話しかけて自己開示をしつつ、相手のことも聞いていく。	
10. グループワークの時、全員の意見を尊重する	
11. 初対面の人と話す時、相手の話を丁寧に聞く。	
12. 初対面の人と話す時、相手のパーソナルスペースには入らずに一定の距離を保ちながら話しかける	
13. プレゼンの前に、たくさんの情報を徹底的に時間をかけて調べあげる	
14. グループワークで積極的に発言をする	
15. 初対面の人と話す時、相手の長所を見つけて会話でそれを伝える	
16. 初対面の時、相手の名前と顔を整理し覚える	
17. 初対面の人と話す時、積極的に相手の話を引き出す	
18. プレゼン前に、頭の中でイメージトレーニングする	
19. 初対面で話す時、共通の話題を見つける	
20. プレゼン前に情報をまとめて仕上げをする	
B. 学習場面	
1. ひたすら覚えることを書く	
2. 覚えたい言葉の関連したことを思い浮かべて覚える	
3. 必要な道具以外は持ち込まない	
4. 文章を作る際は、まず全体的な流れを考えてから文を考える	
5. 静かに作業を行える環境を整える。	
6. 何度も問題集を解く	
7. 話の中で分からない言葉が出た時にすぐに調べる。	
8. 例題や練習問題で途中の式もきちんと書く。	
9. 覚える単語を繰り返して音読する	
10. 期限と自分の集中力を考えて計画を立てる	
C. アルバイトの場面	
1. お客にいつも笑顔で接する	
2. 積極的に会話を進めてお客に楽しんでもらう	
3. 目を見て聞かれたことには的確に答える	
4. できるだけお客に共感する	
5. 1つのことに集中して行う。	
6. 周りを見ながら行動をしている	
7. メニューの種類や後片付けの仕方など業務に関連することをある程度覚える	
8. 自分でも何度か勤務時間外に自分の業務の練習をする	
9. 注意されたことをその場で復唱する	
10. バイト仲間に自ら積極的に声をかける	
11. お客に対して、常に思いやりをもって接している。	
12. 接客で、積極的に大きな声を出す	
13. その時の環境に合わせて臨機応変に効率の良い順番で進める	
14. 予備の有無を常に確認する	
15. ひとりひとりの性格や個性にあった接し方をする	
16. お客が話しやすい雰囲気づくりをする	
17. 視野を広げる	
18. 事前に業務に関しての準備をする	
19. 言われたことをすぐに行動して体で覚える	
20. バイト仲間に自分の話をする	

検討を行うことで、適切感と感情ごとの日常生活における影響度の差異を検討することが可能になると考えられる。

今回の研究では、感情面では比較的ポジティブな感情と不安や緊張感といったネガティブな感情が抽出されたことから、一定の感情の生起はあったと考えられる。しかしながら、何も感じなかった等の無心の回答があり、集中して方略に取り組んでいることで感情の生起がなかったことが考えられる。この感情の生起に関しては、以下のようなことが言える。目標達成時と不達成時において、促進焦点と防止焦点では質的に異なる感情の2次元性が見られ、促進焦点では喜び-落胆次元、防止焦点

では安心-不安次元を経験する(尾崎, 2011)。このように、達成時と不達成時のそれぞれにおいて2次元の感情が経験されるが、目標の過程の中で経験される適切感はこの2次元の感情を経験する間に存在し、単純な2次元の感情に還元されないとされている。これらのことから、本研究で得られた感情が目標達成の過程時に生じた感情である場合、適切感と結びついて価値の付与に影響を与えた可能性が考えられる。

以上を踏まえ今後の展望として、より段階を踏んだ検討が必要になると考えられる。本研究で作成した質問項目は、適切感の観点から制御適合が生じている場面と方略を集めたものである。方略を使用する際に必要とする技術の観点からみれば、制御適合理論で定義されている方略と、制御焦点ごとで得意とされている課題の種類を加味することで初めて方略の分類が可能になると考えられる。また感情の分類については、方略の使用前・使用中・使用後といった時系列の観点からどのように感情の次元の変化が生じているかを捉えることで、適切感の生起をより詳細に検討できるだろう。

本研究の限界として、対象者の制御焦点を特性と捉えているため、状況の制御焦点について加味できなかったことが挙げられる。そのため、制御焦点の要因が方略の分類にどの程度影響しているのかを検討することができなかった。外山ら(2017)や尾崎ら(2012)の研究などでは、状況としての制御焦点を操作する場合に、制御焦点のプライミングを行っていた。このように、状況の制御焦点を統制した上で方略を検討することで、よりその焦点の中で使用される方略の特徴を踏まえることが可能になり、それにより熱望方略と警戒方略の概念整理につながることが考えられる。したがって、制御焦点との関連性を検討していく場合に、特性としての制御焦点は尾崎・唐沢(2011)のPromotion/prevention Focus Scale 邦訳版(以下、PPFS 邦訳版)を用い、状況による制御焦点では先行研究に従ってその要因を統制した上で関連性を検討することが必要になる。

〈追記〉

本稿は甲南女子大学人間科学部心理学科に提出した卒業論文の一部に、加筆・修正を加えたものです。本調査にご協力いただきました皆様をはじめ、卒業研究における計画から執筆までご指導いただきました甲南女子大学人間科学部心理学科の山田尚子先生、本稿執筆にあたりご指導いただきました九州大学院の金子周平先生に深く感謝申し上げます。

文献

- Camacho, C. J., Higgins, E. T., & Luger, L. (2003). Moral value transfer from regulatory fit: What feels right is and what feels wrong is wrong. *Journal of Personality and Social Psychology, 84*, 498-510.
- Crowe, E., & Higgins, E. T. (1997). Regulatory focus and strategic inclinations: Promotion and prevention in decision-making. *Organizational Behavior and Human Decision Processes, 69*, 117-132.
- Florack, A., Ineichen, S., & Bieri, R. (2009). The impact of regulatory focus on the effects of two-sided advertising. *Social Cognition, 27*, 37-56.
- Hazlett, A., Molden, D. C., & Sackett, A. M. (2011). Hoping for the best or preparing for the worst? Regulatory focus and preferences for optimism and pessimism in predicting personal outcomes. *Social Cognition, 29*, 74-96.
- Higgins, E. T., Idoss, L. C., Freitas, A. L., Spiegel, S., & Molden, D. C.,

- (2003). Transfer of value from fit. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 1140-1153.
- Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, 52, 1280-1300.
- Higgins, E. T. (2000). Making a good decision: *Value from fit*. *American Psychologist*, 55, 1217-1230.
- Higgins, E. T. (2005). Value from regulatory fit. *Current Directions in Psychological Science*, 14, 209-213.
- 杓名翔子・中島綾香・五十嵐哲也 (2011). 中学生の友人関係スタイルと怒り表出との関連, 愛知教育大学保健センター紀要, *Iris health*, 10, 23-11.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法——創造性開発のために——, 中公新書.
- Molden, D. C., Lee, A., & Higgins, E. T. (2007). Regulatory focus. In J. Shah and W. Gardner (Eds.), *Handbook of motivation science* (pp.169-187). New York: Guilford Press.
- 尾崎由佳 (2011). 制御焦点と感情——促進焦点と防止焦点にかかわる感情の適応的機能——感情心理学研究, 18, 125-134.
- 尾崎由佳・唐沢かおり (2011). 自己に対する評価と接近回避志向の関係性——制御焦点理論に基づく検討——心理学研究, 82, 450-458.
- 尾崎由佳・唐沢かおり (2012). 自己評価と接近回避志向: 制御焦点の活性化による相関関係の変化, 対人社会心理学研究, 12, 59-65.
- 外山美樹・湯立・長峯聖人・黒住嶺・三和秀平・相川充 (2017). 制御適合が価値に及ぼす影響, 筑波大学心理学研究, 54, 1-6.

A Preliminary Study of Scale Constructs on Regulatory Fit and Emotion in Daily Life of Female College Students

Fumika MATSUNAGA

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

According to Higgins' Regulatory Fit Theory (2007), "Feeling Right" is created by Regulatory Fits in which the goal orientation and strategy match. "Feeling Right" is the subjective sense that "I am pursuing my goals using the right means (Ozaki, 2011)". The purpose of this study is to classify situations in which a "Feeling Right" arises the strategies used in those situations, and emotions that arise. In this study, 78 female university students were surveyed about "Feeling Right" in their daily life. Consequently, questions for three situations and strategies to be used in each were developed, and emotions were classified into nine categories. It is difficult to classify the strategies as eager and vigilant, therefore, it is necessary to further examine the components of the strategies, in order to apply the strategies in Regulatory Fit Theory. In case of emotions, using time-series analysis will help examine the influence of "Feeling Right" and other emotions. It is necessary to consider the strategies that can be used in daily situations.

Keywords: Regulatory Theory, Regulatory Fit Theory, Feeling Right